

近代活版印刷の祖 本木昌造の功績

暦年	西暦	年齢	主な事項
文政7年	(1824年)	1歳	6月9日馬田又次右衛門の次男として生まれる。 (新大工町乙名北島三弥太の四男説もある)
天保5年 弘化元年	(1834年) (1844年)	11歳 21歳	オランダ通詞本木昌左衛門の養子に。オランダ通詞となる。 オランダ使節コープス来崎の際、通訳を行い、褒美として 白銀5枚、手当銀百目等を賜る。
嘉永元年	(1848年)	25歳	蘭書植字版、印刷機を、通詞仲間北村元助・品川藤兵衛・ 榎林量一郎とはかって、オランダより買い入れる。(わが 国鉛活字輸入の最初)
嘉永4年 嘉永6年	(1851年) (1853年)	28歳 30歳	流し込み活字を案出する。辞書「蘭和通辯」を刊行。 小通詞過人となる。
安政元年	(1854年)	31歳	ロシア使節プチャーチン来崎、通訳。 ペリー2度目の来日に伴い下田に幕府より派遣され、ロシア 使節の通訳も行う。
安政2年	(1855年)	32歳	海軍伝習所の伝習掛に。 甲比丹ドンケル・キュルシュス、医師ファン・デン・ブル グについて、分離、測量、算術、石炭及び鉄製造等を学ぶ。 活字判摺立方摺立掛を命じられる。 造船・海軍について由緒書を提出する。
安政3年	(1856年)	33歳	幕府より銀5枚を賜る。
安政4年	(1857年)	34歳	文法書シntaxスを刊行する。(528部印刷) 英和对訳商用便覧を出す。
安政5年	(1858年)	35歳	活版師インデルマウル、新製植字の仕法を伝授する。 昌造の長男、昌太郎没。(6歳) 昌造の妻、縫没。(23歳)
安政6年 万延元年	(1859年) (1860年)	36歳 37歳	出島蘭館において「物理の本」を出す。 和英商売対話集初編(塩田幸八発行)を刊行する。
文久元年	(1861年)	38歳	長崎製鉄所御用掛となる。 蕃語小引(増永文治・内田作五郎発行)を刊行する。
文久3年	(1863年)	40歳	長崎製鉄所でヴィクトリア号、チャールス号の2蒸気船を 買い入れ、本木昌造船長として操縦する。
元治元年	(1864年)	41歳	4月チャールス号で大阪、紀州へ、7月ヴィクトリア号で 小倉へ。
慶応4年 明治元年	(1868年)	45歳	11月ヴィクトリア号で下田を出港後八丈島に漂流。 (江戸経由で翌年9月長崎に帰る) 崎陽雑報を発行する。(日本初の地方紙 木活字と金属活 字の混合)「秘事新書」を出版する。
明治2年	(1869年)	46歳	7月長崎製鉄所頭取役を命ぜられる。 浜町・築町間に日本最初の鉄橋(くろがね橋)を架ける。 新街私塾を開く。(現長崎県市町村職員共済会館) 製鉄局機関伝習方教頭になる。
明治3年	(1870年)	47歳	上海よりウイリアム・ガンブルを招く。 活版伝習所を唐通事会所跡に設立。(現長崎市長立図書) ウイリアム・ガンブルより電胎鑄造母型による活字製造法 を習得。
明治4年 明治5年 明治8年	(1871年) (1872年) (1875年)	48歳 49歳 52歳	新町活版所を新街私塾内に創業。(日本初の民間活版事業) 明朝鑄造活字を使用して「保建大記」を刊行。(新町活版所) 大阪の鉄橋(高麗橋)を架ける。 3月長崎新塾出張大阪活版所を開設(酒井三造・小幡正蔵 を遣わす) 10月横浜に活版所を開設(陽其二・上原鶴寿を派遣) 12月わが国最初の日刊新聞「横浜毎日新聞」を発行 12月京都で「點林堂印刷所」を開設(古川種次郎他)
明治45年	(1912年)		10月東京に小幡活版所開業 平野富二が東京に長崎新塾出張活版製造所を開設。 9月3日長崎において没す。大光寺に葬られる。 (法名は故林堂釈永久悟密居士) 従五位を追贈される。

